

個別最適な学び
協働的な学び

主体的・対話的
で深い学び

アクティブ・ラーニング指導用ルーブリック

アクティブ・ラーニングの視点から、不断の授業改善を図るため、授業を自己・他者評価する際の基本的な５つの視点を指導用ルーブリックとして示した。
視点１と視点５は、目指すべき目標と学びの評価であり、これらは授業の根幹と捉える。

1 児童生徒が目標を理解し、課題に興味をもって取り組んでいたか。
【目指すべき目標・評価規準の設定等】

□指導計画に基づき、適切な目標(資質・能力の三つの柱に基づき「何ができるようになるか」)が設定できたか。
□本時の目標に正対する評価規準・評価方法が設定できたか。
□児童生徒の学習意欲を高められる導入場面であったか。（学習問題や課題の工夫、提示方法の工夫など）

2 児童生徒が自分の考えを表現することができていたか。
【主に主体的な学びの視点】

□本時の課題を正しく伝え、見通しをもたせることができたか。
□自分の考えを表現することができるように、（主につまずいている児童生徒への）支援方法を準備し、支援することができたか。
□自分の考えを表現することができるように、教具の工夫、適切な時間や場の設定等の準備ができたか。
□学習活動は、目標の実現につながっていたか。

3 児童生徒が友達の発言を受け止め、自分の意見と比べていたか。
【主に対話的な学びの視点】

□児童生徒の考えを広げ深められるような、学習形態（個人、ペア、グループ、全体）は設定できたか。
□児童生徒の考えを広げ深められるよう、教具（具体物、ＩＣＴ等）を工夫し用いていたか。
□目標の実現につながるように児童生徒の考えを可視化（ホワイトボード、ＩＣＴ等）できたか。

4 児童生徒が思考・判断・表現する活動を通して「見方・考え方」を働かせていたか。
【深い学びの視点】

□児童生徒が本時に働かせるべき「見方・考え方」は、明確であったか。
□児童生徒に「見方・考え方」を働かせることができる学習活動を設定することはできたか。
□児童生徒が働かせていた「見方・考え方」を可視化（ホワイトボード、ＩＣＴ等）できたか。

5 児童生徒が「分かったこと」「やったこと」や「できたこと」など、学びの成果や課題を実感していたか。
【学びの評価・振り返り】

□評価規準・評価計画に基づき、本時の児童生徒の学習状況を捉え、個々・グループ等へ支援する（キャッチ&レスポンスする）ことができたか。
□目標に準拠した指導と評価となるよう、学習の状況を適切に評価することができたか。
□児童生徒が本時の学習を振り返ることができる場面が設定できたか。

本ルーブリックを授業の振り返りとしてだけではなく、単元や授業の計画づくりの段階でも積極的に活用することで、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実につなげ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を図る必要がある。
その際、各々が児童生徒観や教材観を十分に見つめ、教師としての指導観を深め、教材研究を通して教科の本質等に迫る、学びを十分に追究する姿勢を持ち続けることも大切である。（「観」の視点）
併せて、教材・学習材・人材といった学習環境を工夫することで（「材」の観点）、子供たちが自ら学びの時間を刻む「非同期の学び」が「主体的・対話的で深い学び」につながるよう、教師の働きかけを工夫すること。

R5学校訪問での達成状況

授業の根幹



グッドプラクティスから見える、授業改善のポイント

埼玉県学力・学習状況調査の結果から児童生徒の学力を特に伸ばした「教科担当」「学級担任」を抽出し、その教師の「質問紙調査」における質問項目を調査したところ、共通して以下３つの項目に最も力を入れていることがわかった。子供の学力を伸ばした教師の取組（グッドプラクティス）を参考にすること。

1 本時の課題を正しく伝え、子供に見通しをもたせること

目指す子供の姿
課題が「自分事」となる

〈子供の具体の姿〉
- 課題を自分自身の問題として捉え、その解決に意欲を持っている。
- 解決に向けて具体的・積極的に取り組んでいる。
- 現状に満足せず、常によりよい解決策を探究している。

単元計画、課題の設定（教科等、単元や本時による）
- 教科の特質や単元内容に応じて子供が単元計画を立てたりする。
- 単元、本時の課題を子供の言葉で立てる。
- 単元、本時のゴールを示す。
- 前時の終末に、次に学ぶことは何かを考える。→次時の課題につながる。

➡P10、11へ

導入の工夫
- 導入は簡潔にし、実物の提示やＩＣＴの活用、日常生活につながる課題設定をする。
- 問題や課題は声に出す。
- 単元・本時でどのような資質・能力が身に付くかを教師が説明できる。また、子供がどんなことができるようになればよいのかを明確に示すことができる。

➡P10、11へ

2 子供一人一人の伸びや変容を気にかけ、積極的に認め褒めること

目指す子供の姿
友達や教師のよさに気付く

〈子供の具体の姿〉
- 友達を認め合う言葉や、お互いを励まし合う言葉をかけることができる。
- 相手の思いや考えに気付いたり、受け入れたりすることができる。
- 自分のよさに気付き、よりよい自分になれるように取り組むことができる。

意図的・計画的
- １週間を１サイクルと考え、学級の子供を認める・褒める。
- 直接的ではなく、間接的にも褒める等、第三者による肯定的な評価を伝えると効果的である。「○○先生が『どんなことにも取り組む姿勢がよいね。』と褒めていたよ」等。

➡P5、6へ

導入の工夫
- 結果ではなく過程を認める・褒める。
- 「一生懸命に取り組んでいるね。」、「色々な方法を考えたから答えが出せたね。」等、机間指導の中で具体的に声かけを行う。
- 振り返りを活用して認める材料にする。

➡P5、6へ

3 子供の考えを広げ深められるよう、教具を工夫して用いること

目指す子供の姿
見方・考え方を働かせている

〈子供の具体の姿〉国語や算数・数学の場合
- 個別の事象を帰納的に集めて、共通点を見出し一般化している。
- 正解にとらわれず、様々な解法を探究している。
- 根拠に基づいて筋道を立てて考えている。

学習の個性化
- タブレットを使うか、ノートを使うかを子供が選択できるようにする。
※タブレット、ノートのよさを子供が理解しているとよい。
- 子供の実態や課題に応じて個で考えたり友達と相談したりするなど子供が選択できるようにする。
※土台となる学級・教科経営が整っていることが大切である。

➡P8、10へ

ＩＣＴの活用
- ＩＣＴが効果的な場面ではＩＣＴを活用し、アナログが効果的な場面ではアナログを活用する。
- 思考ツールを活用する。
- 各種アプリケーションの共有ノート機能やデジタルホワイトボード機能を活用する。

➡P9、10へ

➡P5、6、7へ

考えをつなぐ
- 話すことも大切だが、それ以上に「聞くこと」、「友達の考えがわかること」を大切にして、価値付ける。
- 教師はファシリテート役に徹して説明や解説は最小限にし、目的とゴールを明確にするとともに、発言しやすい雰囲気をつくり、子供たちの学びや気づきを活性化する。

ファシリテーション力を高めることで、学びの主語を子供たちに

①子供の発言をつなげる（学びの促進者）：教師と発言した子供と１対１の会話だけで終わっていないか。
②子供に気付かせる（学習者中心）：教材研究で得たものを教える・伝えるだけになっていないか。
③子供の学びに伴走する（学びの伴走者）：子供が教師に相談したときに、安易にすぐ答えを教えていないか。
④子供が学びに向かう（個別最適・協働的）：課題の難易度はどうか。クラスは協働的に学びに向かう雰囲気であるか。

グッドプラクティス R2～R5　R2　R3　R4　R5

子供たちの学びの深まり方は、教師の関わり方ひとつで大きく変わります。

4

子供を主語にした学びの実現

主体的・協働的な学級に向けた「学級経営リフレクション」

主体的・対話的で深い学びを実現するためには、指導法の改善とともに、その前提となる学級経営の充実が欠かせない。以下を踏まえ、**主体的・協働的な学級経営**に向けたリフレクションに取り組み、質の高い学びを支える**「誰一人取り残されない学級づくり」**を目指しましょう。

埼玉県学力・学習状況調査や国際的な調査においても、学級経営と学力が正の関係にあることが示唆されています。

学級経営リフレクションシート

▼「リフレクション」は「内省」

リフレクションとは「反省」ではなく、自分の行動や考え方について強みも弱みも客観的に見つめ直し、思考や行動に変化をもたらすことで成長につなげる行為である。その際、必要となるリフレクションの視点を整理したものが、次頁に示す「学級経営リフレクションシート」である。

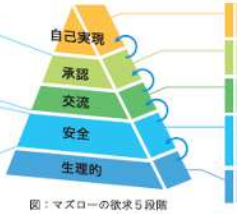
▼「学級経営リフレクションシート」

各学校より推薦された**３５名の「学級経営が巧みな教師」に共通する優れた実践知**を言語化した資料であり、以下「２つの視点（縦の系統）」と「４つのテーマ（横の内容）」で構成している。

２つの視点

- 視点②：主体的・協働的な学級（主に、子供同士の関係・集団に関すること）
- 視点①：安心・安全な学級（主に、教師と子供との関係に関すること）

まずはここから！



図：マズローの欲求５段階

主な関わりの対象

自己実現	夢や目標に向かって挑戦し、主体的に生きることを求める段階。
承認	自身の個性や能力を発揮し、他者から認められることを求める段階。
交流	他者との親密な関係や安定的なコミュニケーションを求める段階。
安全	危険や不安から守られるなど心身の安心・安全を求める段階。学級経営の土台。
生理的	食事や睡眠をとることなど、身体的に最低限の環境を求める段階。

主に集団／主に子供同士／主に教師

４つのテーマ

A	子供から信頼される教師の姿勢・態度
B	一人一人の子供を大切にする取組・工夫
C	落ち着いて過ごせる環境をつくる取組・工夫
D	子供の関係や集団の力を高める取組・工夫

２つの視点は、A・マズローの欲求段階説（欲求は下位から順に満たされていくという理論）を基にしています。テーマは「学級経営が巧みな教師」の実践を整理し、上位の概念を抽出したものです。

すべての学級で視点②を目指していきますが、視点①の充実が前提です。また、視点②もゴールというわけではなく、よりよい学級を目指してどんな学級であってほしいのか、具体的な子供たちの姿を思い描き、その達成に向けた手を打っていくことが大切です。

活用方法（例）

	いつ・誰が	どのように
基本的な活用	定期的（個　人）	**まずは「視点①」を重点的にリフレクション** **▼自身の取組を映す鏡として** 自身の取組をシートの項目に沿って振り返る。４つのテーマに沿ってどのような点に強みや弱みがあるのか、全体的な状態を把握する（①）とともに、よりよく伸ばしたい点や特に課題のある項目を絞り込む（②）。②について、対応方針（目標）を決め、改善方法について同僚と情報交換をしたり、調べたり（次頁下段も参照）して実践する、というサイクルを回す。その際、同僚からのフィードバックを受けることも有効。
その他の活用	年度当初（チーム）	**▼道標として** 年度当初にどのように子供たちと関わっていくか等について、シートを基に関係する教師で確認する。特に重点的に取り組むことなどを決めて各自で実践し、学年会等で情報交換をしながら取組をブラッシュアップする。
その他の活用	校内研修等（学　校）	**▼協議のタネとして** 事前に各自でリフレクションをした上で、校内研修等でよりよい学級経営について情報交換をする。その他、各種データと照らし合わせながら各項目を視点として授業研究の協議をしたり、生徒指導上の課題を分析したりすることも考えられる。

学級経営と
学力は
正の関係にある

学級経営リフレクションシート（第１版）

視点① 安心・安全な学級づくりに向けて
主に教師と子供の関係に関すること【安全】段階

No.		
1	子供の話に耳を傾け、寄り添って気持ちを理解しようとしているか。	子供から信頼される教師 → 姿勢・態度
2	場当たり的な指導を行わないよう、褒めたり、指導したりする際の原則となる判断基準をもっているか。	
3	子供の成長を第一とするために、アンガーマネジメントに努めているか。	
4	いじめや安全に関わる行動・発言に対して、毅然と指導しているか。	
5	行動や発言は子供の範となるように振舞っているか。	一人一人の子供を大切にする → 取組・工夫
6	保護者とのつながりを大切にし、子供の気になる点や課題だけでなく、よさを共有するなどして定期的な連携に努めているか。	
7	子供の最新の実態を把握するために、見る・話す・聞く・調べる・行動を共にする等、様々な方法で情報を集めているか。	
8	問題行動等に対しては、人格を否定することなく「行為」を指導しているか。	
9	当番や係活動、班活動等、学級における役割を一人一人の子供に持たせているか。	落ち着いて過ごせる環境をつくる → 取組・工夫
10	教師の話に対して、子供が聞く状態になっているか、話を理解しているかを確かめながらコミュニケーションを取っているか。	
11	「いいね」「すごいね」など、子供の間に前向きな発言や反応が増えるように教師の声掛けを工夫しているか。	
12	整理整頓や清掃、掲示物の更新等により、学びに向かえる教室環境を整えているか。	
13	UD（ユニバーサル・デザイン）の視点を取り入れ、どの子供にとっても過ごしやすい教室環境づくりに努めているか。	
14	挨拶や返事、相手を見て話を聞くことなど、対人関係を良好にするための取組をしているか。	子供の関係や集団の力を高める → 取組・工夫
15	子供の望ましい行動を取り上げ、学級全体の行動に反映させようとしているか。	

視点② 主体的・協働的な学級づくりに向けて
主に、子供同士の関係、集団に関すること【交流】【承認】段階

No.	
16	現在の実態を踏まえて目指すべき学級の姿や目標を見据え、その達成に向けて計画的・段階的に指導しているか。
17	教師自身が自己開示に努め、弱みも含めて一人の人としての姿を子供たちに見せているか。
18	指導をした後は、改善の様子を見取るとともに、必要なフォローをしているか。
19	個々の子供の伸びや変容を捉え、そのことを具体的かつタイムリーに伝えているか。
20	特定の子供だけでなく、多くの子供が意見を述べたり、活躍したりできるようにしているか。
21	「困った子」は「困っている子」であることを理解し、行動の背景を探り、環境を変えたり支援の引き出しを増やしたりすることなどの対応を行っているか。
22	話を端的にする・わかりやすくする・子供の意欲や必要感を引き出そうとする等、子供への伝え方を工夫しているか。
23	子供の小さな変化やサインを見逃さないよう、注意深く子供や子供同士の関係を見ながら、必要な支援をしているか。
24	間違いや誤った意見も大切に扱い、子供たちが意見を述べやすい雰囲気づくりをしているか。
25	目指すべき学級の姿や目標を子供と共有し、形骸化することなく様々な場面で生かしたり、振り返ったりしているか。
26	子供同士の間で自己開示や他者理解をしたり、相互に認め合ったりする活動を取り入れているか。
27	教師が介入しない方が子供の自律性を高める場合もあることを理解し、状況に応じて子供に考えさせたり、委ねたりしながら、その様子を見取っているか。
28	子供同士が折り合いを付けたり、納得解を導き出したりできるように、集団におけるよりよい意思決定の仕方を指導しているか。
29	ルールやきまり等を決める際は、子供たちの意見を取り入れたり、話し合わせたりして、子供自身が自己決定したと感じられるようにしているか。
30	子供の発意・発想を生かした活動を支援し、子供たち自身が学級文化を創り出せるようにしているか。

改善のヒント

資料名		対応する項目（上段）	内容	対応QRコード
戸田市 指導の重点・主な施策 バックナンバー	H30	12 13	P.11 教室・授業のUD化	①
	R2	21	P.11 児童生徒の「気になる行動」へのアプローチ	②
	R3	20 22	P.3 わかりやすい指示出しや発問 P.4 「つなげる」授業づくり	③
		11 14	P.10 ポジティブな行動支援（PBS）	
その他	R4	文部科学省	生徒指導提要	④
	R4	教職員支援機構	基礎的研修シリーズ 学級づくりに関する研修動画 ※R6.4月時点 小学校版のみ	⑤
	H30	国立教育政策研究所	みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動【小学校編】	⑥
	R5		学校文化を創る特別活動【中学校・高等学校編】	⑦

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦

活用上の留意点

No.１～３０の取組等が学級経営のすべてではありません。また、取組の実際は、子供の発達段階や実態に応じても異なります。

しかし、２つの視点と４つのテーマはすべての学級に共通することです。まずは、リフレクションを通して、「動き出す（＝同僚に聞く・事例を調べる等して実践する）」ことが大切です。



授業改善も学級経営とは不可分です。また、視点2を経て「自己実現」段階（前ページ参照）を目指すためには、よりよい学びの存在が不可欠でしょう。授業改善に向けては、P.３の「アクティブ・ラーニング指導用ルーブリック」とともにP.４の関係資料や過去の「指導の重点・主な施策」が参考になります。



リーディングスキルテストの視点に基づく授業改善 5

主体的・対話的で深い学びの実現に向けては、児童生徒の汎用的読解力を育成していくことが重要となります。

これまでの本市での研究において、RSTの数値は県学調の結果とも相関関係にあることが明らかになっています。ここでは、RSTの各項目についてと授業との関連について要点を示します。詳細については下記のQRコードからこれまでに掲載した授業改善のポイントを確認し、授業改善を進めましょう。

汎用的読解力…理科、算数・数学など、全ての教科等に求められる、文章に書いてある事実を正確に読み取る力。

RST各項目	授業との関連
◆係り受け解析（DEP） 「主語」と「述語」や「修飾語」と「被修飾語」、「目的語」など文の基本構造を把握するカを示す項目。	**▶教科書の本文や問題文などを音読・視写する** 国語だけでなく、算数・数学や理科、社会といった各教科等で、教科書を音読したり、教科書に記載の説明や定義などを視写したりすることで、正しい理解につながります。 **▶主語や指示語が指す内容を確認する** 主語は何か、指示語が指す内容は何かなどを確認することで、正しい理解につながります。 【授業改善につながる児童生徒への発問の例】 「教科書の～は誰が行ったことですか。」 「教科書の『その特徴』とは、どんな特徴ですか。」 「○○が行ったこととして教科書にはどんなことが書かれていますか。」
◆照応解決（ANA） 代名詞などが指す内容や省略された「主語」を正確に認識するカを示す項目。	

係り受け解析（DEP）、照応解決（ANA）はRSTの6項目の中でも汎用的読解力の基本となる項目です。児童生徒に対して、教科書の言葉を補う発問をしたり、正しく理解できているか確認したりすることで児童生徒の正確な理解を促します。また、教師が2つの項目に留意して説明や指示を行うことで、伝わりやすい的確な説明や指示につながります。

他の項目についても、下記の説明や例を参照し、授業改善や児童生徒の汎用的読解力の向上につなげましょう。

◆同義文判定（PARA） 二つの文が同義（同じ意味）であるかを判断するカを示す項目。	**▶根拠をもとに、考えを表す** 定義や教科書の本文など根拠をもとに正しいか考えたり、自分の考えをもったりすることで、根拠に基づいた考え方を育成することにつながります。 **▶他者の意見と比較し、同じ内容か考える** 話合いなどの時に、自分の意見と相手の意見が同じ内容か考え、その理由を言葉にして表すことで、根拠に基づいて判断する力の育成につながります。
◆推論（INF） 基本的な知識と常識から論理的な判断をしたり、これまで学習したことから考えたりするカを示す項目。	**▶課題に対して、既習事項から考える** 課題に対して、今までの内容がどう関係するか考えることで、既習事項から論理的に考える力の育成につながります。 **▶反例を考える** 反例（定義などに当てはまらない例）を考えることで、同じ内容であるかや回答が正しいかなどを正確に判断する力の育成につながります。 【授業改善につながる児童生徒への発問の例】 「○○さんの意見で～という言葉が出てきましたが、他の表現をした人はいますか。」 「教科書では、どのように説明されていますか。」 「二人は同じような意見だけど、そう考えた理由や根拠になった教科書の部分も同じか確認してみよう。」（児童生徒の話合いへの介入）
◆具体例同定（INSTd） 辞書に表された定義などからそれに当たる具体例を認識するカを示す項目。	**▶新出語句やわからない言葉を調べる** 新しく学んだ学習用語やわからない言葉などを辞書やインターネット等で調べることで、調べる習慣が身に付き、あいまいな理解にせず、正確な理解につながります。 **▶自分の言葉で表現したり、具体例を考えたりする** 学習の振り返りなどの場面で、学習した定義などについて自分の言葉で表現したり、それに該当する具体例を考えたりすることで、正しい理解や学習内容を活用するカの育成につながります。 【授業改善につながる児童生徒への発問の例】 「教科書の○○はどんな意味ですか。」「辞書ではどのように書いてありますか。」 「この単元で学んだことやわかったことを書いてまとめましょう。」 「今回学習した○○について、具体例を考えてみましょう。」
◆具体例同定（INSTs） 理科や数学などに表された定義などからそれに当たる具体例を認識するカを示す項目。	

教育のための科学研究所HP

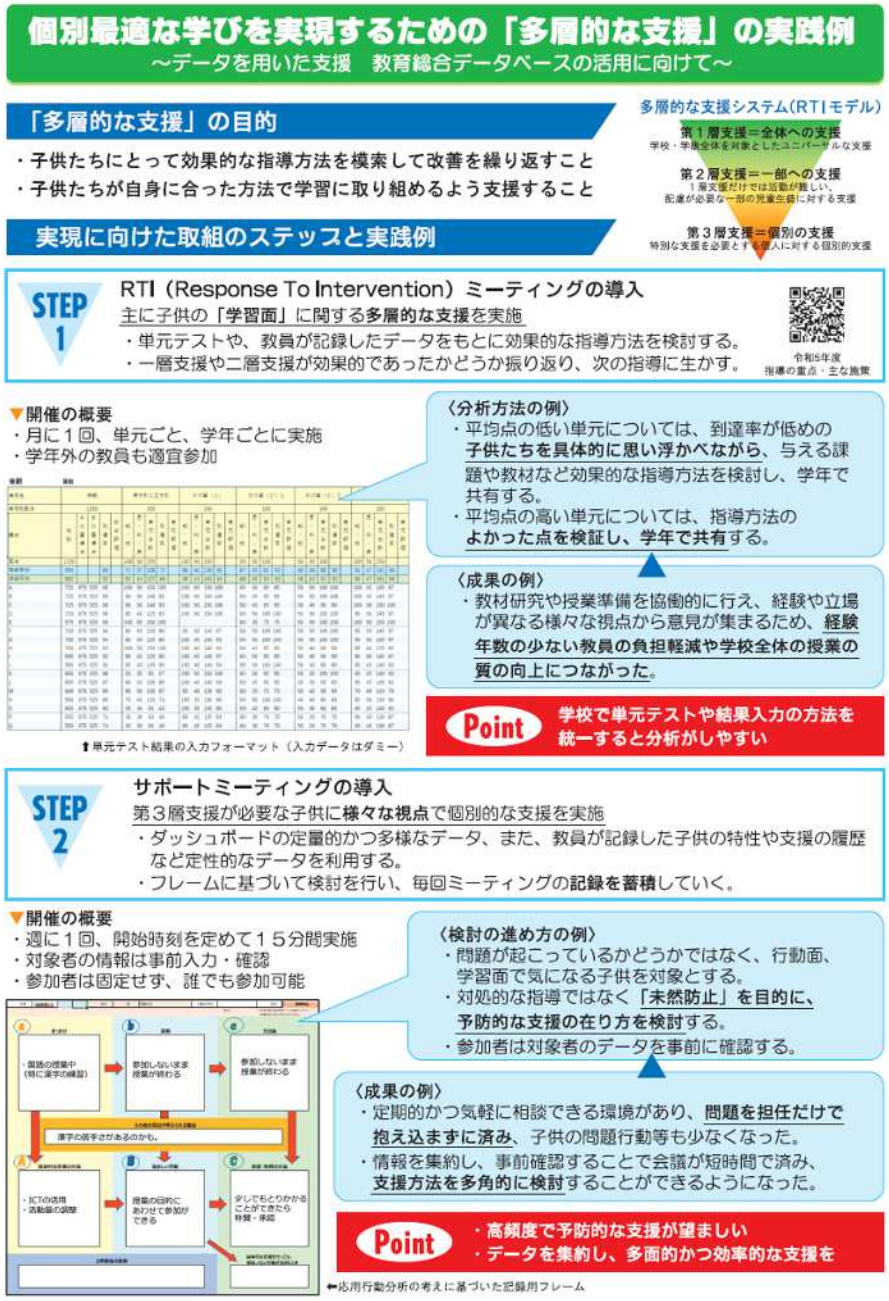
RSTの視点に基づく授業改善1～4 R1 R2 R3 R4

RSTを活用した授業改善の視点から R5

8

汎用的読解力の育成

教師の的確な指示・説明



個別最適な学びを実現するための「多層的な支援」の実践例

～データを用いた支援　教育総合データベースの活用に向けて～

「多層的な支援」の目的

・子供たちにとって効果的な指導方法を模索して改善を繰り返すこと
・子供たちが自身に合った方法で学習に取り組めるよう支援すること

多層的な支援システム（RTIモデル）

第１層支援＝全体への支援
学校・学級全体を対象としたユニバーサルな支援

第２層支援＝一部への支援
１層支援だけでは活動が難しい、配慮が必要な一部の児童生徒に対する支援

第３層支援＝個別の支援
特別な支援を必要とする個人に対する個別的支援

実現に向けた取組のステップと実践例

STEP 1

RTI（Response To Intervention）ミーティングの導入

主に子供の「学習面」に関する多層的な支援を実施

・単元テストや、教員が記録したデータをもとに効果的な指導方法を検討する。
・一層支援や二層支援が効果的であったかどうか振り返り、次の指導に生かす。

令和5年度 指導の重点・主な施策

▼開催の概要
・月に１回、単元ごと、学年ごとに実施
・学年外の教員も適宜参加

⬆単元テスト結果の入力フォーマット（入力データはダミー）

〈分析方法の例〉
・平均点の低い単元については、到達率が低めの子供たちを具体的に思い浮かべながら、与える課題や教材など効果的な指導方法を検討し、学年で共有する。
・平均点の高い単元については、指導方法のよかった点を検証し、学年で共有する。

〈成果の例〉
・教材研究や授業準備を協働的に行え、経験や立場が異なる様々な視点から意見が集まるため、経験年数の少ない教員の負担軽減や学校全体の授業の質の向上につながった。

Point 学校で単元テストや結果入力の方法を統一すると分析がしやすい

STEP 2

サポートミーティングの導入

第３層支援が必要な子供に様々な視点で個別的な支援を実施

・ダッシュボードの定量的かつ多様なデータ、また、教員が記録した子供の特性や支援の履歴など定性的なデータを利用する。
・フレームに基づいて検討を行い、毎回ミーティングの記録を蓄積していく。

▼開催の概要
・週に１回、開始時刻を定めて１５分間実施
・対象者の情報は事前入力・確認
・参加者は固定せず、誰でも参加可能

⬅応用行動分析の考えに基づいた記録用フレーム

〈検討の進め方の例〉
・問題が起こっているかどうかではなく、行動面、学習面で気になる子供を対象とする。
・対処的な指導ではなく「未然防止」を目的に、予防的な支援の在り方を検討する。
・参加者は対象者のデータを事前に確認する。

〈成果の例〉
・定期的かつ気軽に相談できる環境があり、問題を担任だけで抱え込まずに済み、子供の問題行動等も少なくなった。
・情報を集約し、事前確認することで会議が短時間で済み、支援方法を多角的に検討することができるようになった。

Point ・高頻度で予防的な支援が望ましい
・データを集約し、多面的かつ効率的な支援を

9

教育総合データベースの効果的な活用

デジタル・シティズンシップ（DC）育成のための３つの柱

そもそも、なぜDC教育が必要なの？

これからは学校だけでなく、日常生活においてもデジタル活用が前提となります。
教師主体で制限・禁止していてはＩＣＴの活用は進まず、必要な力も身に付きません。
これからはデジタルのメリットを踏まえ、情報社会を築く子供たちの主体的な利用が大切であり、これまでの情報モラルから**デジタル・シティズンシップ**※へ、**学びの質的転換**を目指していく必要があります。

※情報やテクノロジーに積極的、批判的に関わり、それらを責任もって適切かつ創造的に活用し、自他の権利を尊重しながら行動・社会参加する実践的な能力（戸田市における定義）

R4指導の重点
ＤＣへの質的変換



DC育成のためにはどうすればいいの？

①**子供主体の学び**を推進しましょう。日常的な活用の中で実践的に育成します。
②**年間３時間の授業**を位置づけています。**各教科等との関連付け**も大切です。
③DCの考え方や学んだことについて**家庭と共有し、連携して育成**しましょう。

R5指導の重点
ＤＣ授業づくりの
ポイント

柱① 子供主体の学び

・日常的なＩＣＴ活用（文具化）
・子供主体のルールメイキング



低学年からＩＣＴを文具的に活用

柱② 核となる授業

・特別活動を中心に３時間実施
・各教科等とＤＣの関連付け



年度初めのＤＣ授業「責任のリング」

柱③ 家庭との連携

・学んだことを家庭と共有
・保護者と語る機会の設定



全校一斉でのＤＣ教育授業参観

戸田市の教育における生成AIの利用について

▼戸田市教育委員会の基本方針

・本市においては、従来より「ＡＩでは代替できない能力」と「ＡＩを活用できる能力」の育成を目指している。
・教職員による生成ＡＩの利用に際しては、生成ＡＩを「正しく怖れ、前向きに活用する」ことが必要がある。
・児童生徒の「情報活用能力」や「デジタル・シティズンシップ」育成の観点から、生成ＡＩ自体を学ぶ授業や各教科等における教師主体の利用方法の創出が必要である。

▼利用環境

・教職員が現行のGoogleアカウントを用いて利用するものとしては「Gemini※」を対象とする。※令和６年２月８日に「Bard」から名称変更

▼利用上の留意点

・学校現場において、生成ＡＩの利用規約上の対象年齢を下回る形で、児童生徒に直接利用させないこと。
・授業で教師が利用する生成ＡＩによって生成される情報は、正確性や信頼性に課題があり、必ずしも正しいとは限らないことを児童生徒と十分確認し、メディアリテラシー（吟味的・批判的思考）の観点を取り入れること。
・情報漏洩の可能性があることから、氏名、成績等の個人情報や機密性のある情報などについては厳に入力しないこと。
・有害なコンテンツが含まれている可能性や著作権侵害の可能性があることから、児童生徒に提示する際には事前に十分な検証を図ること。



自動作曲ＡＩアプリを活用した音楽授業（小学校）



ChatGPTについて考える授業（中学校）

校務での利用から
校務・学習双方での利用へ

「戸田市の教育における生成ＡＩの利用に関するガイドライン」
（令和5年9月 戸田市教育委員会）

※校務や学習での具体的な活用方法も掲載

10



子供たちが無意識にICTを活用している姿



戸田型ＰＢＬ(Project-Based Learning)の考え方 6

現状 調べたことを発表して終わる総合からの脱却が図られつつある。

課題 成果物を作成することや、外部機関と連携することが目的化している授業も見られる。

R6重点 子供たちの資質・能力を育む視点のもと、戸田型ＰＢＬの定義及び要件に沿って、単元の見直しを図る。

戸田型ＰＢＬ（課題解決型学習）の定義とは

具体的な誰かの要望や自身の願望にもとづき、何をしていくか（課題）を決め、期限内にその目標の達成や理想の実現（解決）を目指す活動を通じて、「未来を切り拓く力」を身に付ける社会に開かれた探究的な学び（学習）

課題の捉え方

・やりたいことは何か
・自分たちができることは何か
・やらなければならないことは何か
➡なすべきことは何か？

戸田型ＰＢＬ(課題解決型学習)にするための要件

単元設計の際にチェックすること

- □「誰の何のため」という、対象と目的が具体的かつ明確である
  ▲水害を調べて発表しよう⇒◎必要な防災グッズを親に提案し、家族を守ろう！
- □ 解決(目標の達成、理想の実現)をしたかの基準が明確である
  ▲ゴミを拾う人を増やすことがゴール⇒◎ゴミ拾いイベントに１００人集めたらゴール
- □「あなたなら何をするか」という実行方法を問う課題である
  ▲防災とは何かを考えよう⇒◎防災について知ってもらうために私達に何ができるだろうか？
- □ 解決したかどうかを検証し、次につなげる活動の時間がある
  ▲最終結果をまとめて発表した⇒◎未解決理由を探り、改善策を考え（実行し）た
- □ 振り返りの視点を示し、学びの自覚化を促す時間がある
  ▲チェックシートに○×を付ける⇒◎何を学び、どう活かすか等を子供自身が言語化する
- □ 探究的な学習のプロセスを繰り返し、学びを発展させている

戸田型ＰＢＬ発展のイメージについては、右記ＱＲコード「令和３年度 戸田市 指導の重点・主な施策」を参照

目的や解決した姿が明確だと、整理・分析等の活動の際も視点が逸れずに話し合うことができる。課題の再設定等の際も意識するよう促すと効果的。

実行したことによって、課題が解決したか、取組の効果があったかどうかについて、対象者や専門家から、客観的なフィードバックを得て、探究のサイクルを複数回実行する機会を設定することが効果的。

活動への振り返りにだけになっていないかに注意をする。【例】「今日は成果物について友達と話し合った。」
活動を通して次はどのように課題解決に向かっていきたいかを考えること。また、どのようなな力が身に付いたのかを振り返る場面を設定することが大切。

戸田市小・中学校児童生徒プレゼンテーション大会の金賞校の発表には上記の要件が盛り込まれています。

実践事例（令和５年度戸田市小・中学校児童生徒プレゼンテーション大会より）

笹目小学校の実践

☑「誰の何のため」という、対象と目的が具体的かつ明確である
➡笹目小学校の全ての子供たちが、図工の作品を壊さないで持ち帰れるようにしたい
☑ 解決(目標の達成、理想の実現)をしたかの基準が明確である
➡立体作品を持ち帰ったときに、どの学年の子供でも壊れないで持ち帰れる
☑「あなたなら何をするか」という実行方法を問う課題である
➡図工の作品を壊さないで持ち帰る方法とは何かを考え、全校児童に伝える

こわれなかった 100%

YouTube
令和5年度 会賞 笹目小学校「図工の立体作品を壊さずに持ち帰ろう」

新曽中学校の実践

☑「誰の何のため」という、対象と目的が具体的かつ明確である
➡小学生が、被災時に一人の時でも命を守れるよう正しい防災知識を知ってほしい
☑「あなたなら何をするか」という実行方法を問う課題である
➡鍵っ子に対し、防災について正しい知識を伝える防災ゲームを開発し提案する
☑ 解決したかどうかを検証し、次につなげる活動の時間がある
➡小学生にテストプレイをしてもらいフィードバックを受けて、分かりやすい防災ゲームに改善する

YouTube
令和5年度 会賞 新曽中学校「鍵っ子に安全を届ける防災ゲームの提案」

★戸田型ＰＢＬをより質の高いものにするために、

「戸田型ＰＢＬ」の考え方	平成31年度	指導の重点・主な施策
「ＰＢＬの授業設計」	令和２年度	指導の重点・主な施策
「活動」や「学び」をホンモノ化するポイント	令和４年度	指導の重点・主な施策
「学習意欲」をホンモノ化するポイント	令和５年度	指導の重点・主な施策

平成31年度 令和2年度 令和4年度 令和5年度

12

戸田型PBLを より質の 高いものへ